

聴講した学生からの感想

問題解決への道筋

医学部2年 須恵 彩理咲

今回の学生研究発表で、個人的には、研究医養成プログラムが印象に残りました。

まず、研究医養成プログラムについてですが、相羽先輩、三上先輩の研究内容を聞き、レベルの高さに圧倒されました。また、1つ上の学年であるだけを見ると、普段の勉強とは別に研究内容を勉強されたのかと思うと、大変な努力が必要だったのではないかと思います。私は学外のサークル、日本国際医学ESS学生連盟で、基礎医学部門に所属しています。昨年、大学対抗基礎医学研究発表会を聴きに行ったのですが、他の大学のチームが自分たちで研究室へ行き、実際に基礎研究を行ってその成果を英語でプレゼンテーションされるのを見て、いつか埼玉医科大学でもチームを作って、プレゼンテーションできたら良いなと思いました。普通に大学生活を送っていたら、研究室でチームと協力して研究して発表する、なんて経験はなかなか訪れません。ただ、埼玉医科大学には、研究もできる環境があるのだと改めて思いました。基礎医学を研究することで、現在ではまだ解決できていない小さい悩みから大きい困難まで、様々な「問題」の根幹に自から関わるができると思います。また、臨床に出れば、今、自分が患者さんにできる医療はこんなにも限られたものしかないのか、とぶち当たるときが絶対来るのではないかと思います。そこで医師の自分はその問題にどう対応していくのか、やり方は様々ですが、研究というやり方で問題解決に取り組む方法があるのではないかと考えます。

私自身、将来の具体的な医師像はまだ持っていないのですが、中学・高校時代に英国で得た英語力を活用していきたいと思っており、研究をするのに英語が使われるのではないかと少し思います。また、研究を行う事で、目の前にいる患者さん、日本人のみならず、世界の人々のためにつながるのではと思い、そのような形で、恩恵を受けた地の方々へも恩を還元できるのではと考えています。

テーマの不深掘りから感じたこと

医学部2年 松永 真幸

医学部3年生による二つの研究発表を視聴し、専門性と質の高い研究で非常に驚いた。おそらく、医学部の講義や演習をこなしているだけでは、到達できないほどの深い知識や着眼点であると感じた。つまり、学生のうちから研究マインドを持って自分で決めたテーマを掘り下げていくことがとても重要であると示してくれたと思う。

特に、私が印象に残った発表は、相羽弘貴さんの「サルコイドーシスにおけるCD26陽性T細胞サブセットの病理学的解析」である。肉芽腫性疾患の症例を用いて得られた結果から、サルコイドーシスを引き起こす物質が何であるのかまで、考察されていたからである。

また、私自身の知識不足により理解できない部分もあったが、調べながら聞いていくことで、臨床に直結するような知識も広がったからだ。肉芽腫の原因物質が炎症反応を引き起こす免疫物質の病変によるものということ、結核が肉芽腫の一つであることすら知らなかった。よって、研究発表を聞くだけでも様々な知識が吸収できた。

さらに、相羽さんの研究では病理組織の標本写真が出てきたことで、サルコイドーシスと結核ではマーカー分子の現れ方の違いを見ることができて興味深かった。私自身では、サルコイドーシスに特有な病理組織を診断できる力はないが、このように実際に顕微鏡をのぞき病変を特定できると治療の方針も立てられるのでとても重要なことだと感じた。

相羽さんが考察で述べていたTh17が関与しているとなれば大きな発見であると思うので、引き続き他の症例でも研究を行ってほしいと思う。

今回、学生の研究でもここまでできるのだと示してくださった先輩方に敬意を表するとともに、レベルは違えど、私も研究マインドを常に持った医学生・臨床医になりたいと思う。

分かりやすい研究発表

医学部2年 山下 祥加

私は、医学部3年の三上さんの発表がとても印象に残りました。研究発表を聴くことができることは楽しみでしたが、先輩方の発表を聞くにあたり、その研究内容を理解できるかどうか不安でした。しかし、三上さんの発表では、その研究を行ったことがない人にでも分かるように発表して下さり、とても分かりやすく、興味が湧きました。そのため、印象に残りました。私は、一年次に行った医科学探索や二年次での発表などで、自分が行った研究や調べごとをそれを知らない人達に対して説明するということはすごく難しいことだと実感しました。しかし、三上さんは、先輩自身が行ったことを他の人に対してわかりやすく説明されていて、とても参考になりました。もし、自分にもそのような機会があったら三上さんのような発表ができるようになりたいです。

三上さんの発表では、抗精神薬の受容体をドーパミン受容体ではなく5-HT受容体すなわちセロトニン受容体に注

目していました。そのセロトニン受容体のアンタゴニストまたは部分アンタゴニストとして三つの新規抗精神病薬を発見されており、感心しました。私も研究に興味があり、課外プログラムで糖尿病の研究を少し始めた所です。論文や先生方の実験をみていても自分で研究を組み立てること

はすごく難しいと感じます。しかし、先輩は自分で研究を進めておられて感心しました。また、先輩の研究発表を聞いてとても励みになり、これからも研究を頑張りたいと思いました。